

7/15 福島県果樹研究所研修視察会実施！

りんご・もも部会新聞

発行
りんご・もも部会
生産指導部
問い合わせ先
営農センター
Tel 23-3933

去る7月15日（火）にJA中野市りんご・もも部会生産指導部主催の「福島県果樹研究所視察研修会」が総勢35名の参加者を得て実施された。

ここ10数年、生産者の高齢化や樹の老木化による生産性が低下する等の大きな問題を抱え、各産地で今後を見据えた新たな栽培方針の確立・普及が進んでいる。JA中野市管内でも、まったく同様の諸問題を抱えており、部会員からも革新的な栽培方法を確立して欲しいとの声も多く寄せられている。

そこで、部会として今回の視察研修会のキーワードを「省力化」「早期多収」の2点に絞り、近年県内外で話題になっているりんご早期開心形栽培やもも低樹高栽培を研究している「福島県果樹研究所」へ赴くことにした。

視察先までは、往復距離750km・往復移動10時間を要し、肉体的にも大変な負担であったが、多数の部会員の積極的な参加があり、賑やかで楽しい視察研究会になった。交通状況で視察先への到着が30分ほど遅れたが、現地視察・研修時間も多分にとれ、大変有意義な時間を過ごした。

視察先では、果樹研究所栽培科の斎藤祐一氏がりんご早期開心形栽培の試験概要、阿部和博氏がもも低樹高栽培のポイントや福島県内のもも生産動向を説明した。

りんごJM台木を利用した早期開心形栽培試験は、14年前（2000年定植）から始まり、年数の経過とともに一定の成果が得られたとして、昨年大晦日の日本農業新聞に試験概要の記事が掲載された。

斎藤氏は、「わい性台木を利用した様々な樹形別試験実施してきたが、薬剤の透過性や作業性・果実品質等総合すると、早めに開心形を完成させることが良い。また、台木別にみると、JM7台が総合的に有利ではないか」と説明した。また、阿部氏は、「今後のもも生産は、生産者の年齢を問わず、やはり省力化・作業の良さを最も重要視していかなければならない。研究所が開発した低樹高开張型樹形を広く福島県内の生産現場に普及していきたい」と熱く語った。

参加者は、各々思うことを積極的に質問したり、実際の圃場を見たり、説明を熱心に聞いたりと視察時間は瞬間に過ぎた。視察の最後に部会長の畔上慶一氏が「今回視察したことを一つの糧にして、新たな栽培方針を確立したい」と挨拶し現地視察を締めくくった。

- （参考）福島県果樹研究所実用化技術情報「りんごJM7及びJM2台木を利用した低樹高樹形の果実生産」
- ・ JM7（わい性）及び2台木（半わい性）を用いて低樹高試験（早期開心形栽培試験）を実施
 - ・ 以下の4つ樹形別の試験を実施し、果実日品質・樹高・作業性を比較した。
 - ・ ①開心形、②遅延開心形、③下枝重点型開心形、④細型紡錘形
 - ・ ①～③の栽植距離は5.5m×7.0m、④は5m×2m
 - ・ 定植年度：2000年
 - ・ 生産量・果実品質・樹高・幹断面積・作業性等を総合的に考慮し、わい性台木JM7台を利用した開心形栽培が有利であると結論つけた。また、JM2台木は強樹勢になり易いため、有効土層の浅い園地では利用可能とした。

- （参考）作業性の良いもも低樹高开張型樹形
- ・ もも栽培の省力軽労化を目的に、低樹高化や樹形の単純化等による樹形改良を行い、省力軽労化が図られる樹形モデルを開発
 - ・ 内容
 - ① 主枝角度を30℃前後に開張させ、樹高を3.5m以下に維持する
 - ② 樹を開張することで樹冠含有面積の拡大が早くなり、早期多収獲が可能
 - ③ 骨格枝を開張することで高さ1.5～3m付近に多くの側枝を配置でき、作業時間が削減できる等
 - ・ 注意点
 - 樹を開張させるため、栽植距離は広めにとる。また、徒長枝の発生も多くなるため、夏季管理を徹底し樹勢維持に努める。